HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	津軽の荒馬の起源についての一考察 : 江戸期の日記・紀行文の記述に着目して
Author(s)	沼倉, 学
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 143, 1-15
Issue Date	2023-12-22
DOI	10.14943/b.edu.143.1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91009
Type	bulletin (article)
File Information	04-1882-1669-143.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院紀要
第143号　2023年12月

津軽の荒馬の起源についての一考察

―江戸期の日記・紀行文の記述に着目して―

沼　倉　　学*

【要旨】 青森県津軽地方[1]には荒馬（あらうま・あらま）と呼ばれる民俗芸能が伝承されている。この芸能は馬の形をした衣装を身につけて，馬の動きを表現しながら踊るもので，青森県内に伝わる虫送り，ボウノカミ送り，ねぶた祭りの年中行事の中で，それぞれ異なる様式で踊り継がれている。

本稿では荒馬の起源について，江戸期の日記・紀行文といった文献史料に限定した調査を行い，文字資料からの考察を行った。

虫送りやボウノカミ送りの行事は1600年代までは虫害や疫病が流行した時に村々で行われ，僧侶による祈祷が見られた。1700年中頃になると，村々で，灯籠を掲げ鉦を鳴らしながら風流行列をする形態が見られるようになった。1700年末頃には，呪術的要素だけでなく，風流行列を楽しむ娯楽的要素が加わった。そして1800年代中期の弘前周辺の地域では，それらの行列の内容を隣の町や村と競い合うようになり，より派手な演出をしようとする中で荒馬が取り入れられた。そして次第に津軽地方全域に広がっていったと推察される。
【キーワード】荒馬，虫送り，ボウノカミ送り，ねぶた祭り，風流行列

1　本研究の目的と方法

1-1　はじめに－総称としての「荒馬」－

青森県津軽地方には荒馬（あらうま・あらま）と呼ばれる民俗芸能が広い範囲に渡って伝承されている[2]。この芸能は，楕円形の枠に木や藁で作った馬頭と尾を付け，踊り手はその枠の中に入って紐などで胴体に固定し，馬頭に付いてある手綱を操作することで馬の動きを表現しながら踊るものである。『民俗芸能辞典』では，荒馬は同じ北東北の青森県南部地方や秋田県･岩手県に伝承される駒踊の一種として「風流芸」の中の「仮装踊」に分類され，「ホニホロ式の騎乗擬態の風流踊」[3]と解説されている。

荒馬の一つの特徴は，伝承地域によってその基盤となる年中行事や踊りの様式が異なることである。

西北五地区（津軽地方の北西部に位置する地域）周辺では虫送りの中で荒馬が踊られる。津軽の虫送りは藁で蛇や龍を模した模型（「ムシ」と呼ばれる）を作り，それを担いで村を練り歩き，稲虫退散や五穀豊穣を祈る呪術的行事である[4]。この地方の荒馬は，一頭の荒馬に二人の手綱取りが付き，即興的な踊りが特徴的である[5]。

中弘南黒地区（弘前市周辺および南の地域）周辺ではボウノカミ[6]送りの中に荒馬が登場する。ボウノカミ送りは悪疫を追い払う疫神祭のことである。「疫ノ神」「疱ノ神」「暴ノ神」と標記することもあるが[7]，近世以前，疱瘡などの疫病はこの疫神が暴れ回ることで起こると

* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程　身体教育論講座（身体文化論）
DOI：10.14943/b.edu.143.1

信じられていた。その悪疫神がその地域に入らぬよう，藁人形（「ボウノカミ」と呼ばれる）を作り，様々な役に扮した人々の行列を伴って村を練り歩き，悪疫退散を祈る行事であった。この地方の荒馬は手綱取りが付かず，馬が単独で踊る様式である[8]。

上磯地方（東津軽地方の沿岸地域）ではねぶた祭りにおいて荒馬が見られる。ねぶた祭りは，元々は旧歴7月7日に行われた七夕の行事で，民間に伝わった「眠り流し」の行事が発展したものと言われている。「眠り流し」とは夏季の睡魔やその他の穢れや災厄を追い払う行事で，人形や灯籠を持って練り歩き最後は川や海に流していた[9]。「青森ねぶた」や「弘前ねぷた」が有名であるが，青森県内では8月1日から7日にかけて広くねぶた祭りが行われている。この地方の荒馬は，荒馬役の男性と馬の手綱を取る女性が組になって踊る様式をとっており，他の地域では見られない独特のものである[10]。

これらの行事は，元々は「神送り」に通じ，人間生活に負の働きかけをする神を鎮圧して再来をこばもうとする儀礼として行われていたが[11]，医学や農業技術の発展や社会構造の変化から行事の本来の意義は薄れ，行事の内容が省略されたり習合したりして，次第に芸能娯楽的なものに変化していったと考えられる[12]。

また，これらの年中行事や祭りは，基本的に「風流行列[13]」の形態で行われる。この行事の主役は「ムシ」「ボウノカミ」「ねぶた灯籠」であり，それらを担いで練り歩き祈願することそのものが祭りの主たる目的であった。したがって，これらの年中行事や祭りについての先行研究では，「津軽地方においては虫送りの行列の先頭に荒馬や太刀振りとよばれる芸能がつく場合が多く見られる」[14]というように，荒馬はあくまで行列に附随する一芸能として語られることが多かった[15]。

荒馬の起源や由緒については，青森県史を初め，各市町村史，郷土研究誌や荒馬を含む風流行列等について探究する関連の民俗学研究の論稿の中で論及されている。

たとえば，青森県教育委員会発行の『青森県の民俗芸能』には，荒馬について「年中行事の虫送り行列に従った荒馬や太刀振りが，近年独自の芸能として行われ」[16]たとある。津軽の民俗舞踊に詳しい進藤幸彦も，津軽に伝わる様々な民俗舞踊を分類する中で，荒馬を虫送りの中の舞踊と位置づけている[17]。

弘前大学民俗研究部の部報『こまおどり』に掲載された小池雅昭の「郷土の芸能－荒馬踊りと駒踊り－」では，荒馬と虫送りとの関連について「西津軽郡と北津軽郡の一部」（西北五地方）と「南津軽郡」（中南地方）では様式が異なることを指摘し，「津軽地方の虫送りと荒馬踊りの関係は元来別個の派生源をもつものであって，虫送りに荒馬踊りが加わったというのは，西，北津軽郡の場合あてはまるが虫送りから荒馬踊りが派生したという南津軽郡の場合一度合体したものが分離したか，又全然合体せず荒馬踊りが独立したまま宗教的儀式から現在の様な芸能に派生したことも考えられる」[18]と考察している。つまりこの論においては，虫送りに見られる荒馬は，後から加わったということになる。そして，南津軽郡の荒馬については，荒馬が元々あったのか後から加わったのか不明であるとしている[19]。

しかし，各伝承地域に記された市町村誌や郷土研究誌の由緒譚や起源説は，民俗学的な視点から考察されたものがほとんどで，年代や伝播のルートを特定する上で実証的な史料は乏しく，踊り継がれてきたことに基づく口承伝承に依拠せざるを得ないものがある[20]。

1-2　研究目的と方法

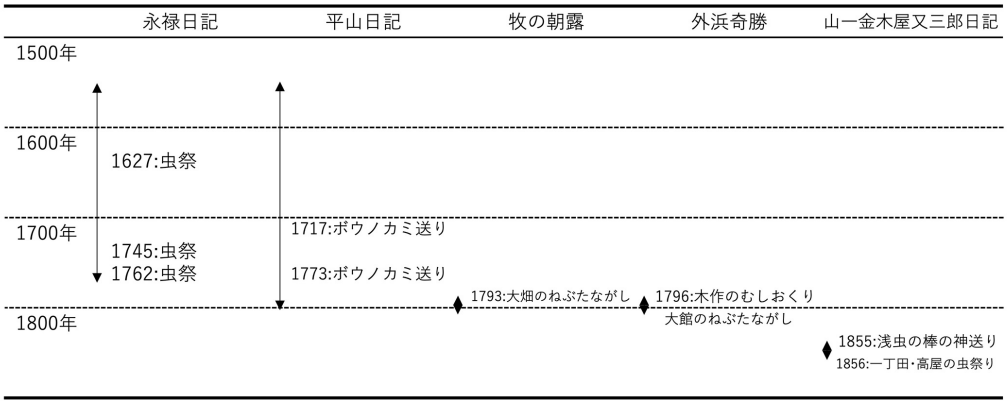
以上述べてきたように，一口に荒馬といっても，それは多様な形態に変化したの民俗芸能を指すことばに他ならない。植木は「ある類型的なものが，ある地域に集中して分布し伝承されるのは民俗芸能のひとつの特色であ」り，「他の伝承と補い合うところで互いに位置づけ合」い，「面としての価値を持つ」と述べている。荒馬も個々の芸能としても魅力的ではあるが，津軽地方を面として捉え，荒馬の分布や差違の比較から，津軽地方の民衆が荒馬を地域文化としてどう受容してきたのかを考察する意義は大きいと考える。

そのような荒馬について書かれた史料は乏しいのだが，荒馬が踊られる年中行事についてはいくつかの史料が残されている。特に本研究が着目する江戸期の日記や紀行文には，当時の年中行事や祭りの様子が記述されており，年代や地域による年中行事や祭りの違いを考察することができる。そして，いつ，どこの記述に荒馬が登場するのか見ることで，荒馬の起源についての手がかりを得ることができると考える。

したがって本研究では，様々な地域において踊り継がれている荒馬に関連する種々の踊りの形態進化・習合・枝分かれを含む民俗舞踊の拡がりについて議論する前に，現存している文献史料らの考察を行うこととした。なお，各地域において踊り継がれている踊りが有する体系を構成する個々の下位カテゴリーを詳細に分類し，その形態進化・拡がりの可能性を分析することは別稿にて論じたい。本稿ではそのための前段階として，江戸期の日記・紀行文における虫送り，ボウノカミ送り，ねぶた祭りの記述を対象とし，そこに記載されている年中行事・祭りの内容や荒馬の有無を考察することで，津軽の荒馬の起源について文献史料に限定した検討を行うことを目的とする。

研究方法として，以下の一次史料を用いて行う。18世紀末から19世紀に書かれた以下の文献史料は，郷土史ないし民俗史研究によって「虫送り」,「ボウノカミ送り」,「ねぶた」についての記載を含むことが指摘されているものであり，復刻版も存在している。なお，風流について語る古文書はむしろ限定的であり，他に新たな史料発掘がなされる可能性は低く，少なくとも，現存する下記の古い史料にみる内容を整理しておく必要性はあろう。津軽の藩政時代の様子を記録した『永禄日記』(1791年頃成立，復刻版の全集1983年)[21],『平山日記』(1803年頃成立，復刻版の全集1967年)[22]，菅江真澄が青森の習俗を記録した『牧の朝露』(1793年頃成立，復刻版の全集1971年)[23],『外浜奇勝』(1796年頃成立，復刻版の全集1971年)[24]，江戸後期の津軽の風土や暮らしを記録した『山一　金木屋又三郎日記』(1862年頃成立，復刻版1995年)[25]の5つを研究対象とする。これらの史料が書かれた期間と，対象とする記述の執筆年を「表1　日記・紀行文の執筆年代と，各年中行事の執筆時期」に示す。

表1　日記・紀行文の執筆年代と，各年中行事の執筆時期（筆者作成）



2　藩政時代の日記・紀行文に見られる風流行列の形態ついて

2-1　『永禄日記』,『平山日記』に見られる虫送りとボウノカミ送り

『永禄日記』は，津軽藩ができる以前，この地方を治めていた浪岡北畠氏の後裔山崎氏による家記である。代々家憲として書き続けてきたものを山崎立朴が編集したとされている。1558年（永禄元年）から1772年（安永7年）までの記録には，年の豊凶，天候の異変など，さまざまな出来事について記されている[26]。

『平山日記』は，五所川原市湊の平山家の家記で，同家六代の平山半左衛門が編著ではないかと考えられている。1550年（天文19年）から1803年（享和3年）までの出来事が記録されている。特に農業に関する記述が多い[27]。

虫送りは「虫祭（ムシマツリ）」と記述され，2つの日記を突き合わせると，1627年（寛永4年），1745年（延享2年），1762年（宝暦12年）の3回行われていたことがわかる。

1627年（寛永4年）の虫祭について，『永禄日記』には次の様に記録されている。

> 六月初頃より稲虫（オビタダシク）夥敷（ザイザイ），在々虫祭（ツカマツ）仕ル。然（シカルト）処南光坊天海僧正江被仰付御祈禱（オオセツケラレゴキトウ）七日有（アリ）[28]。

『平山日記』にはその年の正月から天災が続いたことが，次の様に記されている。

> 正月元日大風，二月大地震　地割（ジワレ）候（ソウロウホド）程，春立（タチヨリ）ゟ水不足，六月初頃（ヨリ）ゟ稲虫多付（オオクツキ），在方（ザイカタ）ニ而（テ）虫祭仕（ツカマツリ）候（ソウロウ），然（シカルト）所御預之御出家（オアズカリノ）ニ被仰付（オオセツケラレ）候（ソウライテ）而御祈禱（オオセツケラレゴキトウ）七日有り[29]

この年は，元日から大風，2月には地割れがするほどの大地震，春からは水不足になり，6月には虫害は発生するという天災続きの年であった。そこで「在々」，つまりあちこちの村々で虫祭が行われた。また，南光坊天海という僧侶が仰せつけられて7日間の祈祷を行った。

村々で行われた虫祭の形態や様子はこの記述からは不明である。また，南光坊天海の祈祷も村々で行われた虫祭の1つだったのか，それとも藩などが取り仕切る公式の祈祷だったのか，後者のようにも読みとれるが断定はできない。

1745年（延享2年）の虫祭について，『永禄日記』には次の様に記録されている。

> 二月末より能雨降不 申 候。照続候故，草木芽出，花も早く春土用中ニ不殘ひらき申 候。六月土用中天気悪敷，土用後も大分寒く候。七月十五日強き南風朝四時より日暮迄吹，出穂ニハ当り不申候。 未 出 候 稲ニ当り候やと見候処，其後八月中旬に段々枯穂 出 候 間，すい白虫付候而，左様ニ可有之と在々虫祭 仕 候[30]。

この年は，2月末から雨が降らずに日照りが続き，花や草木は春の土用（4月下旬頃）には全て咲いてしまった。しかし，6月になると一変して天気が悪くなって気温も下がり，7月15日に1日中吹いた強い南風の影響で8月中旬には稲穂が枯れてきて，更にすい白虫の虫害に襲われた。それで，村々で虫祭が行われた。

この時も1627年（寛永4年）と同様に虫祭は村ごとに行われたが，その詳細は不明である。

平山日記には虫祭を行った記録はないが，「此年南風虫付等にて大不作在々難儀惣検見願御座候」[31]とあり，この年は南風の影響で大変な不作だったので，困って藩に年貢納入について相談を願い出たことがわかる。

1762年（宝暦12年）の虫祭について，『永禄日記』の記録は下記の通りである。

> 春立雪消遅彼岸二月 廿 八日ニ候 処，三月十四五日迄雪有 閏四月十九日入梅ニ而，同月中植 候 田ハ宜，五月ニ入 植 付 候 分ハ 甚 虫付多，在方虫祭村々ニ有之，虫付稲ハ土用中半より新 萠 出，土用過十日余も草取事。虫付不 申 分ハ 去 秋 之 比 出穂，麦ハ散々不作[32]。

例年は彼岸の2月末には雪が溶けるところ，その年は3月半ばの春になっても雪が溶けず，閏4月に入梅をしたとある。閏月は4月が2回あることで，実際は5月中旬に梅雨入りしたことになる。その時期に植えた稲の多くに虫がつき，それで村々で虫祭が行われた。虫がついた稲は7月下旬（夏の土用半ば）には芽が出て，虫がつかなかった分は昨秋に比べて穂が実った。しかし，麦は散々だった。

『平山日記』には虫祭についての記録はないが，以下の様な記録がある。

> 春立雪消かたく彼岸二月 廿 八日の処三月十四五日早く雷有之候，閏月有之故可有之候，四月の閏月に春夏共余り荒々敷く無御座の年にて豊年に成る[33]

3月半ばまで溶けず，3月半ばには雷があった。この年は閏月がある年で，その春夏は荒れることが無く，豊年になった。昔から雷が多い年は豊作になるといわれ，この年も雷が早くあったことが記述されている。永禄日記と合わせて読むと，虫が多い年だったので虫祭を行い，その御利益だったのかその後の気候も穏やかで，豊作を迎えることができたようである。

これらの史料から，江戸期津軽地方の虫祭は村々で行われ，その1つの形態として僧侶による祈祷があったことがわかる。しかし，現在の様な行列を伴う祭であったかどうかは定かでない。また，3回しか記録が残されていないことから，虫害が酷かった年に記録した可能性が考えられるが，年中行事としてそれ以外の年も虫祭が行われていたのか，害虫が発生した時

にだけ虫祭が行われていたのかはこの記録からは読み取れない。

次に，ボウノカミ送りについて見ていく。『平山日記』には1717年（享保2年），1773年（安永2年）の2回，ボウノカミ送りが行われた記録があるが，『永禄日記』にはその記録は見られない。ただし，その時期に「時疫」が流行したと記載されている。

1717年（享保2年）のボウノカミ送りに関する『平山日記』の記録は次の通りである。

> 此年夏ゟ時疫ニ而諸人相煩，段々うつり候間，諸人是を嫌い，其家の前通候ニも，走り歩行候　程之事ニ候，然共何程嫌候而も当り前の節は相煩，死絶多御座候，依而ぼうの神一ヶ村ニ而五度七度宛送り申候得共一向其印無之候而，其翌年も病残り之者相煩，三四年之間無止事，人多死或ハ家ニ奇死絶之族も有之候[34]

この記録では，この年の夏から時疫が流行し，病人がいる家の前を通る時は走って過ぎようとしていたようであるが，そのような行為もむなしく多くの死者が出た。それで，ボウノカミ送りを「一ヶ村ニ而五度七度宛送」ったとある。1つ1つの村で5度送ったり7度送ったりしたということだと思われるが，ボウノカミ送りについても村々で行われていた。しかし，その甲斐もむなしく，3，4年は疫病が止まなかった。

『永禄日記』にも，翌年の1718年（享保3年）の記録に「其夏より時疫流行皆々煩　候故，日雇之者無之，作手入難儀仕　候。」[35]とある。夏より疫病が流行して皆が感染し，働き手がいなくなって困ったようだ。

1773年（安永2年）の疫病は深刻で，ボウノカミ送りだけでは無く，大掛かりな祈祷も行われた。『平山日記』には次の様に記録されている。

> 此年四月より時疫はやり初は村のはつれ小家或は派杯と言所より病出し卒に大熱に成り一向寒熱のふけさめと申無之して只大熱症にて病出しより八日めに必大戦慄来りふるい止て大汗出て大便痛する者は活戦慄来ても汗不出者は死す，（中略）右に付古来先例有之由にて山伏頭大行院え御物入の御祈禱被仰付人形を作り御国中山伏の長老なる者を集メ十七日の祈禱行法甚新にして皆耳目を驚し候，六月十四日まて右祈禱満シ同十五日大行院は乗物にて山伏数百人附添青盛へ行き同所の海江送り候処四五日過候て右人形亦々渚へ寄候由，是を見て只事に有之間敷と申候，祈禱初より青盛への道路同所の海え送り候迄諸人参詣夥事也，然共其験少しも相見得不申信強大ニ成り申候[36]

『永禄日記』にも上の時期に時疫が流行した記録があり，祈祷の様子が次のようにより詳細に記されている。

> 時疫次第に夥敷事ニ付大行院に而祈禱被仰付候處，古来も例御座候由ニ而，人形を作り国中山伏之長者殿を集，十七日之祈禱ニ而行法甚たあらたにして人皆耳目を驚し候。六月一四日一七日之祈禱満し，同十五日山伏数人ニ而青森へ送り其人形を船ニ乗せ，風之儘に放ちやり候。其間国中参詣夥敷事，参銭之多き事難尽筆紙。然処四五日過，右之人形又々返り参候由ニ而，亦々山伏共参是を送り候。是ハ唯事ニハ不可有，時疫彌増時行可申先兆と人々申候。此祈禱ニ大行院江参候山伏数人ニ候処，此後時疫ニ而皆々相果候。此時青森へ送

り候路次之参銭多候処，是を取候山伏不殘相果候[37]。

上記は次のような状況であったことを伝えている。つまり，この年は4月から疫病が流行し始め，その症状は大熱が出たり寒気がしたりして，8日目に必ずふるえが来て，それが止むと大汗をかき腹を下すと生きられる。しかし，ふるえが来ても大汗をかかないと死亡した。山伏の頭が古来からの方法による大行院での祈祷を仰せつけられた。国中の山伏の長が集められ，17日間という長い祈祷に人々は驚いたようだが，その内容は人形を作りそれを奉るというものであった。そして，数百人の山伏を連れてその人形を青森の港に運び，それを船に乗せて海に流してやった。しかし，4，5日後に人形が港に戻ってきてしまい，これは只事ではないとなった。青森までの道々には参拝する人が多くなったが，疫病が衰える兆しは見えず，ますます感染者は増え，しまいには山伏たちが罹って死んでしまった。

さて，現在もボウノカミ送りが伝承され執り行われている中南地方八幡崎地区に伝わる「八幡崎疫ノ神退散祭由緒」では，この祈祷が八幡崎疫ノ神送りの起源だとしている[38]。そこには，人形を作って祈祷したり海に流したりする方法が記載されているため，現在行われているような藁で男女の人形を作り奉る習わしがこの頃にすでに存在していたことを示しており，その起源であった可能性が考えられる。

『平山日記』にはこの時，村々でもボウノカミ送りや百万遍の祈祷が行われていたことがつぎのように記録されている。

村々にて疫ノ神祭二三度も執行，亦山伏共を頼み火焼ざんまい杯と頓弁いふて怪敷事を致して此疾を遁れんとすれ共弥やますして山伏も段々に相煩死する者多し
村々にて百万遍の念仏を執行すれば宣クとて，皆燈籠を拵蠟燭を悉く費して，葬礼のごとくにして鉦をたたぎだて廻りけれ共是も其験なし[39]

この記録によると，村々ではボウノカミ送りが1度ではなく2，3度行われ，山伏による祈祷も行われたが効果が無く，山伏も病に倒れ死んでいった。また，百万遍を唱えるといいとして，燈籠を作り蠟燭をともして鉦を叩きながら村を回って祈ったが，その効果も見られなかった。

この記述から，この時代のボウノカミ送りは，灯籠を掲げ，鉦を鳴らしながら村を回る行列の形態であったことがわかる。その鉦も「葬礼のごとき」とあるので，祭りのお囃子というよりは，死者を弔うための鉦の音だったと推察される。

2-2　菅江真澄の『牧の朝露』に見るねぶたながしと『外浜奇勝』に見る虫送り

菅江真澄は1793年から1801年まで津軽から下北地方を見聞してまわり，その習俗について記録した。七夕のねぶたながしや虫送りなどの年中行事の記録も残されており，1793年に下北地方を見聞した時，大畑（現むつ市大畑町）でねぶたながしを見て，その様子を以下の様に記述している。

いまだくれはてぬに，わらは，むさかなゝさか（六尺，七尺），あるは丈斗の棹のうれにいろ画かいたる，けたなる火ともしに七夕祭としるして，そが上に小笹薄などさしつかね手ごとにさゝげ持て，「ねぶたもながれよ，豆の葉もとゞまれ，苧がら〜」とはやし，つゞみ，笛に声どよむ

斗(ト)ありくは，（中略）おなじ国ながら久保田（秋田）の里などには，唯燈(タダアカリ)たかくさゝげありけど，さるをこなひもせざりけり。飽（秋）田郡にては，ねぶりながしといへど，こゝにては，ねぶたながしといふめる[40]。

この時代のねぶたの灯籠は，2mぐらいの竿の先につけた灯籠に絵や「七夕祭」の文字を書き，先に小笹薄をつけ，それを手で持って練り歩く形態だった。また，「ねぶたもながれよ，豆の葉もとどまれ」と，鼓や笛の囃子に合わせて歌い歩いた。秋田の里ではただ灯籠を高くささげることはするが，そのような行為はやっていない。そのことを秋田では「ねぶりながし」というが，ここでは「ねぶたながし」といっていた。

この手持ちの灯籠を掲げてあるく形態は，初期の弘前ねぷたに見られる形態と同じである。この手持ちの灯籠が扇型や人形型になり，それがどんどん大型化することで現在の様な「弘前ねぷた」や「青森ねぶた」になっていった。この時に歌われた「ねぶたもながれよ，豆の葉もとゞまれ」という歌は，現在でも歌われることがある。この時代の下北地方のねぶたながしでは，鼓や笛を伴うお囃子が演奏された。これは，先のボウノカミ送りの鉦の音と比べると，だいぶ賑やかなものになっていたと思われる。最後の「唯燈たかくささげあり」とは，秋田の「竿灯」だと推察される。

この3年後，1796年（寛政8年）に津軽地方を見聞して回った時の日記『外浜奇勝』に，木作（現在の木造）の辺りのねぶたながしと大館の虫送りのことが記述されている。

ゆんでに村あまた遠からず見えて，長田村をへて木作(キヅクリ)に到る。このやかたにまつる，やはたのみやどころにまうでて，相知れるかみぬし工藤定当がやどにとぶらひかたらひ暮れば，笛つゞみにはやしどよめけば，わらはべ，をのれ〳〵が手ごとに，燈(アカリ)の器をおもひ〳〵に作りもて，てりかゞやかし，ふりかざし，みちもさりあへず，よひより至るまで人のむれありくは，れいの，ねぶたながしなめり。

五日　けふ斗(ト)はとて，あるじとからたひてくるれば，わらは，大丈夫うちまじり，ねぶたもながれよと，はやしありくかまびすしさ。

六日　（中略）坂くだりて船岡，床前，大館に到るほど，むしおくりすとて，人のかたしろ，むしのかたしろをあまた作りもち，いと〳〵の紙幡(カミハタ)を風にふかせ，つゞみ，笛，かね，宝螺吹(ホラフキ)，ねりさわぎ戯れ舞ひて田づら〳〵をめぐり，はて〳〵は，つるぎ太刀(タチ)してきりはらふのわざもありけるとなん。大なる野良をはる〳〵と過(スギ)て浮田河(ウキタガワ)をわたり御扉(ミトビラ)の浜に来けり[41]。

この日記は，旧暦の7月4日から6日の日記である。4日に木作に着き，宿に入ってくつろいでいると，笛と鼓のお囃子が聞こえてきた。見ると子どもたちが手に手作りの灯籠を持って振りかざし，夜が更けるまで行列になって歩くねぶたながしであった。5日もねぶたながしは続き，「ねぶたもながれよ」とやかましく囃し歩いていた。6日は船岡，床前（現在の床舞），と移動し，大館に着くと虫送りをやっていた。人の形と虫の形の頭を作り，紙旗を振って，鼓，笛，鉦，法螺貝でお囃子を鳴らしながら田の畦などを戯れ舞って歩いていく。その後には「つるぎ太刀して切りはらうわざ」が見られた。

菅江は，木造で子どもたちがそれぞれの灯籠を持ちお囃子を伴い町を練り歩く姿を見て，3年前に下北で見た行事と同じものだと理解し「れいの，ねぶたながしなめり」と記述したと

思われる。その行列の形態はほぼ同じで，灯籠は手に持てる大きさの灯籠をそれぞれ作り，笛と鼓のお囃子を伴った行列であった。「ねぶたもながれよ」という囃し言葉は，3年前の下北でも聞かれた。

6日は大館（現つがる市森田町大館）に移動し，そこで虫送りを見ている。この虫送りには「人のかたしろ」と「虫のかたしろ」が登場する。これは，現在の虫送りやボウノカミ送りに見られる藁で作った「ムシ」や「男女の人形」と考えてよいと思われる。お囃子は鼓，笛，鉦，法螺貝とだいぶ賑やかになっている。そして戯れ舞って歩いている姿から，虫害を追いはらう呪術的な祈祷要素の他に，大きなお囃子をかき鳴らしながら練り歩く娯楽的要素も見られる。

大館の虫送りは，丁度七夕の時期に行われていた。七夕も穢れを水に流して禊ぎをする行事が起源なので，虫害や疫病を村から追い出そうとする「神送り」の思想と通底する。ねぶたながしと虫送りの形態が似ているのはそのような思想的な共通性もあると思われる。また，「つるぎ太刀してきりはらふわざ」というのは太刀振りのことではないかと思われるが，断定は難しい。しかし，荒馬についての記述はない。1796年頃までには，まだ虫送りの中では荒馬は顕著に見られなかった可能性と叙述史料には残らなかった可能性の双方が推察される。

2-3 『山一　金木屋又三郎日記』に見られる虫送り

この日記は，岩木町（現在の弘前市岩木町）で造り酒屋を営んでいた山一金木屋又三郎（本名は武田正三郎敬之）が書いたもので，弘前や周辺地域の町人や役人の暮らしの様子が描かれている。年代としては1837年（天保8年），1853年～ 1860年頃（嘉永6年～万延文久の一部）のことが記されてる[42]。

1855年（安政2年）6月の日記に，浅虫の「ボウノカミ送り」のことが記述されている。

> 十九日には浅虫棒の神（ボウノカミ）送り太刀振り子供十四五人出　其他鑓（ヤリ）　弓　鉄砲　長柄挟み箱　長刀等色々細工致し　猿田彦なども出　行列賑々（ニギニギ）しく　別して太刀振り子供上手にて見事に御座候。中々近村の様なざつなる事に無く候　浅虫は湯の気にて堪え難き暑に御座候[43]。

浅虫では賑やかな行列を伴うボウノカミ送りが行われていたようである。14，5人の子どもによって見事な太刀振り演じられていた。また鑓，弓，鉄砲などの武家の道具や猿田彦の仮装も見られる。この行列は，周りの村で行われているボウノカミ送りのように雑なものではなく，立派な行列だったようである。浅虫は温泉地である。湯の気で暑いのはそのためである。

この日記で1番注目すべき点は，ボウノカミ送りの記述に太刀振りが明記されたことである。菅江の虫送りの記述に太刀振りを思わせる描写がみられたが，この記述では子どもが14，5人参加したことも含めて書かれている。また，鎗，弓，鉄砲といった大名行列の装いで練り歩いている。これは，「八幡崎疫ノ神送り」の行列にも見られる。この基になっているのは「弘前八幡宮の例祭行列」だと思われる[44]。しかし，これらの中にはまだ荒馬は見られない。

翌年の1856年（安政3年）6月19日と6月20日の日記に，一丁田二本木と高屋の虫祭りの様子が次の様に記されている。

六月十九日　晴

店ごみ掃き井戸弐ツかえる　一丁田（イッチョウダ）　二本木虫祭り傘鉾（カサホコ）七八本出　太神楽（ダイカグラ）真似獅子などもでる　太刀振り　荒馬等も出る

六月廿日

今日高屋（タカヤ）虫祭り傘鉾三之助に持たせ遣わす　傘鉾七本旗大小八本　鎗（ヤリ）　獅子　猿田彦真似　馬上山伏の真似貝吹き祭礼構（ガマ）いのよしか　殿様の真似か杉葉の鳥毛（トリケ）弐本　道具挟（ハサ）み箱折（オリイタ）板　奴振り鷹の代わり薄柿色の鶏を紐付け手へ上げ餌差（エサ）しも出る　虫（ムシ）大なる事なり　太刀振り六人　あら馬四人なんだか騒々しき事なり　馬鹿らしき事なり　昨年迄左様の事無く候処　一丁田二本木にて色々出候に付きまけぬと言う訳やら当年はいろ〳〵出る[45]。

この地域の虫祭りには荒馬の記述が登場する。太刀振りも見られる。特に高屋の虫祭りには，傘鉾，旗，鎗，道具挟み箱といった物を担いで持つだけでなく，猿田彦真似，馬上山伏の真似，殿様の真似など，様々な仮装をした人たちが加わり，だいぶ賑やかな行列になっていたようである。大きな虫も見られる。

「あら馬」は手綱取りのつかない単独の馬が4人いたと思われる。「なんだか騒々しきことなり　馬鹿らしき事なり」ということは，整然と列を作って厳かにやるというよりは，面白おかしく賑やかにやっていたと推察される。

また，「昨年迄左様の事無く候処」とあるように，このような行列になったのはこの年からであった。その理由は，「一丁田二本木にて色々出候に付きまけぬと言う訳やら当年はいろ〳〵出る」とある通り，一丁田二本木の虫祭りに「まけぬと言う訳」，つまり，隣の町と虫祭の規模を競い合っていたからであった。このことから，この時代には虫害を払う呪術的要素よりも，娯楽的要素が強くなり，隣の村よりも規模や面白さを競い合う祭りとして実施されるようになっていたようである。「昨年迄左様の事無く」の「左様の事」がこの様な賑やかな行列全体を指しているのか，それとも太刀振りや荒馬を賑やかに面白おかしく行ったことを指しているのかはわからない。

3　結果と考察　ー虫送り，ボウノカミ送りの変化と荒馬の登場ー

以上，『永禄日記』，『平山日記』，『牧の朝露』，『外浜奇勝』，『山一　金木屋又三郎日記』に見られる虫送り，ボウノカミ送り，ねぶたながしの記述を辿ってきた。本研究で使用した文献資料で荒馬が初めて登場するのは『山一　金木屋又三郎日記』の1856年虫祭の記述であった。しかし，その過程をみると，虫送りやボウノカミ送りが持つ行事としての意味や内容が時代や伝播によって変化し，そうした変化の過程を通して，荒馬が現れるようになったことがわかる。

『永禄日記』『平山日記』は，弘前藩内に居住していた山崎家と，北津軽地方（現在の青森県五所川原市周辺）を治めていた平山家の者によって書かれていることから，都市部やそこに近い地域の様子が記述されている。この記述によると，虫送りやボウノカミ送りは年中行事としてではなく，虫害が出たり疫病が流行したりした時に村々で行われていた可能性もあると考えられる。1600年代の記録では僧侶による祈祷の形態が見られたが，1700年代中頃には

村々では灯籠を掲げ，鉦を鳴らして村を練り歩く風流行列の形態が見られる様になった。

『牧の朝露』，『外浜奇勝』では，下北地方と西北地方という都市部から離れた農村のねぶたながしと虫送りのことが描かれていた。それによると，1700年代末には津軽地方の広い範囲にねぶたながしの行事が見られ，それが年中行事となっていた。同様に虫送りも年中行事として行われるようになっていたと考えられる。形態も風流行列が一般的になり，灯籠の他に虫形や人形を作って掲げるようになった。年中行事として執り行われるにしたがって，行事の意味の中に虫害や疫病と行った悪疫を村から送る呪術的要素だけでなく，風流行列を楽しむ娯楽的要素が見られる様になる。お囃子の楽器が増えて賑やかに打ち鳴らすようになり，行列も厳かに歩くのではなく舞ったり戯けたりする人々が現れてくる。

1800年代中頃には，津軽の広い範囲で虫送りやボウノカミ送りが年中行事として行われ，娯楽的要素が強くなっていった。浅虫，一丁田二本松，高屋の風流行列には傘鉾，旗の他にも鑓，弓，鉄砲長柄挟み箱，長刀などの武家の道具や，猿田彦，馬上山伏，殿様などの仮装が加えられ，様々な趣向がこらされるようになっている。これは，当時の弘前藩内で最大の例祭だった「弘前八幡宮例祭」の風流行列が強く影響し，様々な仮装が取り入れられるようになったのではないかと思われる。その背景には，「一丁田二本木にて色々出候に付きまけぬと言う訳やら」[46]とあったように，隣の町や村には負けたくないとする気持ちや，隣の行列よりも派手で見栄えのする行列を出そうとする競争意識があり，年々趣向をこらすようになる中で，荒馬が加えられ，それが津軽地方全域に伝わっていった可能性もあろう。

また，1855年の浅虫のボウノカミ送りには見られなかった荒馬が，翌年1856年の一丁田・高屋の虫祭には描かれていた。1年の差があるので，1856年には浅虫のボウノカミ送りにも取り入れられる可能性はある。但し，一丁田・高屋は旧岩木町内の地域で，弘前のすぐ隣の町であったため，一丁田・高屋周辺地域から荒馬は広がった可能性も残る。また『山一　金木屋又三郎日記』の執筆者が造り酒屋を営んでいたりと，商人の多い町であったことから，経済的にも豊かな地域であったために虫祭の行列の派手さを競い合うことが可能になったことも考えられる。

4　結論

津軽地方の伝わる荒馬の起源について，先行研究の検討から，津軽の南津軽地方に伝承されていたボウノカミ送りの行列に見られた荒馬が，同地方や西南地方の虫送りに習合する中で虫送りの行列でも踊られるようになり，その後上磯地方ではねぶたの中でも荒馬が踊られる様になった可能性はあるものの，それらを断定するまでには文字資料に基づく調査では限界がある。

但し，年代記から，虫送りやボウノカミ送りの行事は，1600年代までは虫害や疫病が流行した時に村々で行われ，僧侶による祈祷が見られたということは同時代史料より断定可能である。1700年中頃になると，村々で，灯籠を掲げや鉦を鳴らしながら風流行列をする形態が見られるようになった。1700年末頃には，それらの行事は年中行事として行われるようになり，虫害や疫病を村から送りだす呪術的要素だけでなく，風流行列を楽しむ娯楽的要素が加わっている。1800年代中期の弘前周辺の地域では，それらの行列の内容を隣の町や村と競い合うようになった可能性もある。より派手な演出をしようとする中で荒馬が取り入れられ，

次第に津軽全域に広がっていった可能性もあろう。

本研究では，現段階で江戸時代後期から明治･大正時代の頃の荒馬に関わる習俗の記録が残っている史料に限定した。津軽の中では弘前周辺地域が荒馬の発祥と考えられるが，そこに荒馬がどこからどのように伝わったのか，その地理的ルートについてはなおも不明である。そのためには，秋田県や岩手県の駒踊りに関わる史料と突き合わせ，更なる検証を行うことが必要であり，今後の課題である。本稿では少なくとも藩政時代から残されている日記・紀行文から提示できる史実を整理することで，まずは以上の結論を得た。これらの文献史料に残された記録を踏まえながら，様々な地域において踊り継がれている荒馬に関連する種々の踊りの形態進化・習合・枝分かれを含む民俗舞踊の拡がりや，その過程においてそれぞれの地域の民衆が何を受容し残してきたのかを考察することで，面として広がる荒馬の価値や意味を検討していきたいと考える。

---

[1] 「津軽地方」は，広義には現在の青森県西部を指す呼称で，江戸時代に津軽氏が支配した弘前藩と黒石藩の領域にほぼ相当する。現在の行政区域としては，青森市を中心とした北東部の「東青地区」，弘前市を中心とした南部の「中弘南黒地区」，五所川原市を中心とした北西部の「西北五地区」の3地区に分かれ，狭義には「中弘南黒地区」と「西北五地区」を指して「津軽地方」と言う場合もある。歴史的にはそういった区分が同じだったわけではなく，境界も明確ではない時代もあったので，歴史的な意味合いを含んだ地域名を指す場合は「津軽」を用いる。

[2] 大石泰夫「第7章　民俗芸能」『青森県史　民俗編』青森県，2014年，345-365頁，では，1994年時点で青森県内の14箇所の地域で荒馬が伝承されていることが示されている。

[3] 仲井幸二郎・西角井正広・三隅治雄編『民俗芸能辞典東京堂出版』東京堂出版，1981年，126-127頁。

[4] 大石，前掲，345-365頁。

[5] 五所川原市相内に伝わる「相内の虫送り」の荒馬は，基本的には囃子のリズムに合わせて地区を練り歩きながら踊るが，所々で道に寝そべって動かなくなったり，進むのを嫌がって後ずさりしたり，馬の心情を即興的に表現する場面が見られる。(2018年6月9日に行ったフィールドワークで踊りを視察し，相内地区在住で地域の民俗芸能に詳しい三和不二義氏より示唆を受けた)。

[6] 「ボウノカミ」の標記は地域によって「疫ノ神」「ボーノ神」など異なっているが，一般的呼称として用いる場合，大石前掲論文に習いカタカナ表記とした。

[7] 尾上町教育委員会社教課編「八幡崎村疫ノ神退散祭由来考」『古里の歴史民俗資料第3集　八幡崎･西野曽江地区編』尾上町教育委員会，1981年，113頁。

[8] 同上，120頁。

[9] 青森県郷土館『ねぶたと七夕』青森県郷土館，1999年，1-15頁。

[10] 進藤幸彦は，津軽地方の荒馬について「たんに暴れ馬の模倣で型も自由に跳ねまわる（俵元)，それぞれ木製の馬頭をかかえた6人が手綱でたがいにつながれて踊る（小泊)，南部藩の駒踊りと類似し，馬体を表わす模型を身につけて多数が円陣を組んで踊る（五所川原藻

川），男女組みになり，女は花笠をつけ扇をかざし，男は駒踊の扮装で連れあって踊る（今別），1人が馬頭模型をかかえこんで踊り，2人が両側で手綱を取って踊る（相内･中里･金木･小曲･長富）」の5つのタイプに分類している。男女組になる今別型は他の地域には見られない（進藤幸彦「津軽の民俗舞踊」『津軽の民俗』吉川弘文館，1970年，395-415頁）。

[11] 仲井ら，前掲，126-127頁。

[12] 尾上町教育委員会社教課編，前掲，113-128頁。

[13]「風流」とは，元々は「みやびやかなもの，風情あるもの，雅致あるもの」の意である。平安中末期には宮廷貴族が築庭や調度・装束などにも風流を凝らすようになり，その世相を反映して祇園祭り等の祭礼行列の曳きものや装束にみやびた趣向を盛り込むようになった。それを契機に，趣向を凝らした山車や仮装行列，華麗な衣装，採物の踊りなどを「風流」と称するようになった。特に祇園祭りや盆踊りなどの怨霊や疫神を鎮送する目的の芸能には華麗な装束の練り衆が囃子を賑やかに奏しながら踊り歩くものが多く，それらの踊りや囃子を「風流」と呼ぶ傾向が強かった。したがって，祭礼の行列も本来は「風流」に含まれるのだが，本研究では行列に焦点を当てるため，多くの演者が列を作って，賑やかに華やかに練り歩く行列を「風流行列」とした。（本田安次「風流考」『日本の民俗芸能Ⅱ　田楽・風流一』木耳社，1967年，565頁。仲井ら，前掲，394頁。独立法人日本芸術文化振興会，風流・風流行列，日本の民俗芸能，https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc27/genre/furyu/gyouretsu/index.html，参照日：2023年8月20日。）

[14] 文化庁文化財部伝統文化課『青森県津軽地方の虫送り-青森県津軽地方の虫送り調査報告書-』文化庁文化財部伝統文化課，2015年，7頁

[15] 特に北津軽地方の虫送りの場合は荒馬を行わない地域も多く地域差があるので，荒馬は虫送りの中心的な芸能ではなく，その地域の特徴的な芸能として位置づけられている。『岩木川流域の民俗』の「民俗芸能」の章では，荒馬はこの地方の代表的な民俗芸能として取り上げられていない（門屋光昭・村中健大「第7章　民俗芸能」『岩木川流域の民俗』青森県，2008年，171-180頁）。

[16] 青森県教育庁文化課『青森県の民俗芸能』青森県教育委員会，1986年，2頁。

[17] 進藤，前掲論，395-415頁。

[18] 小池雅昭「郷土の芸能－荒馬踊りと駒踊り」『こまおどり創刊号』弘前大学民俗研究部，1961年，6-7頁。

[19] 同上，6-7頁。

[20] 津軽地方を特徴づける民俗芸能として挙げられている「三匹獅子踊」「津軽神楽」「荒馬」「太刀振り」のうち，津軽神楽は津軽藩の宗教政策として直接関与したため，起源等に関わる史料が残されている。「三匹獅子踊」は藩政時代の津軽藩の新田開発との関わりから起源や伝承を伝える巻物を複数の団体が持っている。それに対し，荒馬や太刀振りを伝承している地域にはそのような巻物もなく，藩の公式の記録にも残されていないため，史料が少ない（大石，前掲，345-365頁）。

[21] 山崎立朴編，永禄日記，1791年頃成立［永禄日記　みちのく双書第一集，青森県文化財保護協会，1956年］。

[22] 平山半左衛門編，平山日記，1803年頃成立［平山日記　みちのく双書第二十二集，青森県文化財保護協会，1967年］。

[23] 菅江真澄，牧の朝露，1793年頃成立［菅江真澄全集　第二巻，未来社，1971年］。
[24] 菅江真澄，外浜奇勝，1796年頃成立［菅江真澄全集　第三巻，未来社，1972年］。
[25] 武田正三郎敬之，山一金木屋又三郎日記，1862年頃成立［山一　金木屋又三郎日記抜粋編，青研，1995年］。
[26] 山崎，前掲，解題。
[27] 平山，前掲，解題。
[28] 山崎，前掲，32頁。
[29] 平山，前掲，30頁。
[30] 山崎，前掲，172-173頁。
[31] 平山，前掲，263頁。
[32] 山崎，前掲，211頁。
[33] 平山，前掲，325頁。
[34] 同上，194頁。
[35] 山崎，前掲，135頁。
[36] 平山，前掲，362-363頁。
[37] 山崎，前掲，233-234頁。
[38] 尾上町教育委員会社教課編，前掲，113-115頁。
[39] 平山，前掲，363頁。
[40] 菅江，前掲，1971，354頁
[41] 菅江，前掲，1972，148-149頁。
[42] 武田，前掲，504頁。
[43] 武田，前掲，176頁。
[44] 弘前図書館収蔵の『弘前八幡宮祭礼図　壱～伍』には，当時の渡御行列の様子が詳細の描かれていて，武家の道具を持つ姿や様々な仮装の姿も見られる。
[45] 武田，前掲，242頁。
[46] 武田，前掲，242頁。

A Study on the Origin of 'Arauma in Tsugaru': Focusing on Diary and Travelogue from the Edo Period

Manabu NUMAKURA

Key Words

Arauma/Arama, Mushiokuri, Bounokamiokuri, Nebuta Festival, marching in parades

Abstract

Arauma or Arama, which is a fork performing art, remains in the wide area of the Tsugaru in Aomori Prefecture. The performer wears horse-shaped costumes and dances while expressing the movement of a horse. The performing arts are danced in the annual events of *Mushiokuri*, *Bounokamiokuri* and Nebuta Festival in different styles.

About the origin of *Arauma/Arama*, I decided to conduct a survey limited to documented historical materials and to consider from written materials.

Mushiokuri and *Bounokamiokuri* were held in villages when there were insect damage and epidemics, and monks prayed, until the 1600s. By the middle of the 1700s, people began marching in parades, and there were added entertainment element of enjoying the procession, besides magical element that drive away insect damage and epidemic from villages. And in the area around Hirosaki in the mid-1800s, people began to compete with neighboring towns and villages for the contents of the procession, and they took in *Arauma/Arama* trying to make a showy performance. It is speculated that they gradually spread throughout the region of Tsugaru.